

# 情報社会と経済の人間化

高 木 彰

## 目 次

はじめに

### (I) 情報社会と近代化の第二段階

- (1) 情報社会の生成
- (2) 近代化の二つの段階
- (3) 情報社会と経済学のパラダイム転換

### (II) 経済の人間化と持続可能な社会

## はじめに

地球環境問題を発生させた主要な契機は、近代科学の高度な発展と、その成果を取り込んで大規模化している工業社会の強固な機構にあることは周知のところである。その際、そこに見出される基本的な事態について、藤沢令夫は、「世界・自然の在り方を認識する〈知〉と、人間の生き方や行為を導くべき〈知〉との非本来的な分裂ということである」〔1〕194～5頁〕としている。藤沢は、「世界や自然のあり方」と「人間やその行為のあり方」とは「分かち難い一体性」〔1〕4頁〕を保っているものとして捉えているのである。世界・自然を考察するに際して、人間存在の意味やそのあるべき生き方というものは、「不可欠の要因」〔1〕9頁〕であるということである。藤沢は、この本来、一体的統一において存在する諸契機が分裂してしまうところに問題の発生をみようとしているのである。更に、次のようにも指摘している。「科学・技術と、人間の社会的な倫理・モラルとの間」には一種の「均衡」が存在するのであり、地球環境問題とは、その「均衡の破綻という問題」〔1〕15頁〕である。それ故に、地球環境問題は、「科学・技術の現段階における不十分性」によるのでも、「自然科学の進歩が工業化社会の中でもたらした副産物」〔1〕14頁〕という問題でもないのであり、それは「決して科学・技術そのものだけで処理できる問題ではなくて、むしろそれを使用する人間のモラルや実践知と密接に関わっている問題である」〔1〕15頁〕ということである。

世界・自然の在り方の探究に際して、人間の倫理・モラルは「不可欠の要因」であるにも関わらず、それが捨象されてきたこと、或は捨象の論理を近代科学は内包していたことの結果として現出したのが地球環境問題であったということである。科学は我々に真理を提供してくれるかもしれないが、その真理を賢明に使う方法まで教えてくれるわけではないのである。そこでは「私

は何を知ることが出来るか」という問いと、「私はどのように生きてらよいか」という問いは、互いに全く無関係なものとしてされているのである。科学によって「よき人生」とは如何なるものなのかは教えられないということである。その際、藤沢は、科学・技術の発展と人間の倫理・モラルの発達について、「一体性」「均衡関係」において捉えるのであるが、両者は、一種の相関関係にあるものと言えるのではないだろうか。<sup>1)</sup>

何れにしろ、現在の地球環境問題において重要なことは、人間の倫理・モラルのあり方そのものが問われているということである。然るに、問題の困難性は、科学・技術の発展によって「人間のモラルや実践知」がそれ自体一定の変容を被っていることにあるのである。意識自体が科学・技術の思想によって汚染されることが問題なのである。科学・技術の発展は「世界・自然を形作る『四元』（火、空気、水、土）を大きく変質させた」のであるが、それと共に、「その世界・自然の中における人間の行為・行動の在り方、その面での人間の思想・経験・意識構造も又、確実に変質し、或は汚染されつつあるのではないか」（[1] 15～6頁）ということである。問題は、科学・技術によって変容してしまったモラル・倫理のあり方であるということである。

情報社会とは、1970年代前半期を劃期とする現代社会のことであるが、そこでの特徴の一つは、複雑性の増大であるが、それは換言すれば、個性性の強調ということでもある。個の活動の自由度の増大こそ、同じく資本制経済であるといいながらも、工業社会と情報社会を区別する大きな基準でもあるといえよう。情報社会が持続可能な社会として再構成されるためには、人間の倫理・モラルの再編成が不可欠であるが、その際の拠り所は個にあるということである。しかし、そのような主張は、方法論的個人主義との相違を如何に捉えるのかという別の問題を惹起するが、ここでは見ないことにする。近代化の過程として情報社会を捉えるならば、それは第二段階として規定されうるのであろう。その第一段階は工業社会のことである。その意味において近代化は、未だ未完のプロジェクトなのである。

倫理・モラルを人間の活動の具体的な問題として見るならば、消費の在り方として捉えることができる。ここでは、経済学において消費が重要視されねばならないことを二つの点について見てみようとするものである。第一は、情報社会において生の取り戻しを不可避としているという点に関連してであり、第二は、地球環境問題の課題に応える経済活動の中の基本的契機であるという点に関連してである。第一は、近代化の規定に関わる問題であり、第二は、経済活動の基本的契機に関わる問題である。

## (I) 情報社会と近代化の第二段階

### (1) 情報社会の生成

#### (A) 日本経済における情報化の展開

日本において情報化の進展は、一様に生じたわけではない。大きく分ければ、二つの段階がある。第一段階は、1960年代末の頃から始まるのであり、第3世代大型汎用コンピューターが重要なハードウェアであったのである。オンライン集中処理大規模システムが構築され、稼動し始めた段階である。この段階でのコンピューター化は、間接部門が肥大化した産業・企業や、膨大な

事務量をもつ組織においてのみ適格的なものであったのである。第二段階は、1980年代に入ってからのものである。この時期の基盤的ハードウェアは、第4世代コンピューターとマイクロプロセッサ、マイクロコンピューターである。ME (マイクロエレクトロニクス) 化が急速に進行し、プロセスイノベーションの展開、情報ネットワーク・システムの構築の二面から産業構造に大きなインパクトを与えることになったのである。

ME に代表される情報通信技術は、柔軟性と迅速性を特徴とするシステムを実現したのであり、その急速な発展が、生産工程におけるロボットの導入、FMS, FA, CIM, CALS といった製造工程へのコンピューターと通信システムの導入を可能にし、効率的で需要変動に対して柔軟で、しかも迅速に対応できる多品種少量生産システムを生み出したのである。更には、流通部門における POS や VAN, 或は EDI の導入は、消費動向のリアルタイムな把握を可能としたのである。この段階のキーワードは、当初は、ニューメディアと地域情報化であったが、1990年代に入っからは、マルチメディアとインターネット (情報ハイウェイ) へと変化している。

情報化の第一段階と第二段階とでは大きな相違が存在する。第一段階は、大型コンピューターによる「トップ・ダウン・コントロール・システム」において特徴づけられるのである。それはいわば負のフィードバック制御機能を中心とした機器による工程に対する制御が中心であったのである。これに対して第二段階は、パソコンとワーク・ステーションによる情報のネットワーク化において特徴づけられるのである。それは正のフィードバック制御の機能する余地を生み出したのであり、「ボトム・アップ・コントロール・システム」の成立を可能にしたのである。情報化は、原理的にはサイバネティックス原理の確立を意味しているのであるが、その情報化が第一段階の特徴においてのみ捉えられるならば、情報社会も従来の工業化の延長上において捉えられることになるのである。その意味では、第一段階と第二段階とは、同じく情報による対象の制御というサイバネティックス原理における変化として捉えられるとしても、そこには機能的には大きな相違が存在しているのである。前者がファースト・サイバネティックスであるとするれば、後者はセカンド・サイバネティックスである。

## (B) 情報社会の歴史的規定

社会の発展過程において情報社会が如何なる意義をもつのかについて、二通りの考え方が存在する。第一は、情報社会を農業社会や工業社会への移行と並ぶ大きな社会変動と捉えるものであり、現在はそのような社会への転換期にあるとするものである。第二は、工業社会、或は産業社会の一つの形態、或は段階であり、その枠内での社会変化にすぎないと考えるものである。第一の場合、現代社会の発展過程に断絶が存在するものと捉えるのである。それは日本で言えば、1970年代の前半である。経済活動の様相が大きく変化し始めた時期である。これに対して、第二の場合、産業社会の延長上における変化として情報化を捉えようとするものである。テクノロジーの革新は、既存の産業社会を補強するものとして機能しているものであり、情報化を産業社会の高度化の随伴現象として捉えようとするのである。

第一の場合、産業革命がそれまでの手工業を根本的に変革しただけでなく、産業面では、農業をも変革し、農業の工業化、機械化をもたらしただけでなく、それと同様に、情報化は、既存の情報産業を飛躍的に発展させるだけでなく、農業や工業をも情報化の波に巻き込み、産業のあり

方そのものまでも変革するとされとする。その結果、経済社会において産業が現在のような大きな役割を果たすことはなくなり、産業に代わって個人や家族、或はそのネットワーク集団が社会に必要な財やサービス提供の主役になるとするのである。更に、変革の嵐は、文化や政治にまで及び、人々の価値観や生活様式を含む、社会全体が質的にも大転換するというのである。

第二の場合、情報化による影響が現在の産業社会という枠内での変容に留まるという見方である。産業が社会における生産の中核を担うという産業社会の本質は、情報化が進んでも揺るがないという立場である。情報・通信技術の革新によるオンライン・ネットワーク化といえども、工業生産方式の中にきめの細かな情報産業的要素が導入されることであると捉えるのである。現在の産業社会は、科学技術開発システムを制度化し、内部に組み込んだ構造を持っており、激しい開発競争の中で、科学技術を加速的に発展させる仕組みをビルトインしている。この仕組みが、情報通信技術を加速的に発展させ、社会のあらゆる領域の情報化を加速する原動力になるが、それが社会の産業への依存をより一層強めることになるというのである。このような社会は、産業によって提供されるモノやサービスが抜本的に変化するのではなく、性能的に優れ、きめ細かな配慮がなされるようになることを意味している。それ故、そこでの情報社会とは、産業社会の「一層の高度化」、或は「仕上げの段階」とみなされるのである。更に、情報技術の革新、通信技術の革新等による産業と社会の効率性、組織性の一層の上昇ということは、広義の産業化の過程に含まれるものであり、脱産業化の過程を意味するものではないとされる。それ故、情報社会の議論は、狭義の産業化としての工業化の時代の終焉を問題にする限りで意味があるということである。

現在進行中のパソコン、ワーク・ステーションによるネットワーク化の進展は、社会のあり方を大きく変容させるものである。その場合には、二つのことが想定される。社会が参加型としての性格を強めるのか、管理型としての性格を強めるのかということである。それは、組織の権限が、中央集権化するのか、分権化するのかということでもある。情報通信ネットワークの発達は大規模な情報の収集・伝達を容易にするので、少数の人間による管理が不可欠となる。中央への権限の集中は、組織、或は社会全体を考えた資源の最適利用、最適配分を可能にするので、情報化は中央集権化を促すということである。他方、情報化することにより、情報通信システムに載る情報の希少性は薄れるから、システムに載らない情報をもつ現場の人々の重要性が増大し、彼等に権限を委譲しなければ、効果的な管理運営ができないという状況が生まれる。それは権限の分散化を伴うのであり、参加型の社会の形成を必然化するのである。ここで重要なことは、情報概念には、両者の可能性が同じ様に含まれているということである。情報社会が薔薇色の社会になるのか、より強固な管理社会になるのかは、主体性と自律性を獲得した人々の選択によるものであるということである。とはいえ、情報通信技術の革新により可能となる「高度な選択」も、高度に管理された範囲の中での選択でしかないということがありうるのである。情報通信技術を駆使した管理は、人間の自由や権利に対する剥き出しの抑圧を狙いとするような管理ではない。それは、管理されているということすら気付かず、結果的に管理されていたというような高度で巧みな管理を可能にしているということでもある。

ところで、筆者は、かつて資本制生産における歴史的特殊性をマルクスの作成した再生産表式において表示することを試みたことがあるが、そこでは次のように指摘した。「資本制生産にお

けるその歴史的特殊性が、再生産表式においては第1部門蓄積率の独自の・先行的決定として表示されるものとすれば、計画経済、社会主義経済においては、第2部門の蓄積の先行的配置として、しかも、その大きさが計画的・意識的に決定されるものとして措定されるといえよう」〔15〕165頁）。ここで第1部門蓄積率の先行的決定の命題は、情報社会においても、製造業の分野に限って見るならば、厳然として存在するものといえよう。しかし、第2部門蓄積率の先行的配置の命題については不適切である。情報社会を構成する一部分として製造業が捉えられるとき、そこでは消費が決定的重要性を持つに至っているのである。とはいえ、それは情報社会では第2部門蓄積率の先行的配置に転換するというのではない。消費の決定性は、工業社会に対してより上位の階層に属する情報社会における再生産構造の在り方に関わるのである。工業社会と情報社会とは、階層的関係において同時的に存在するのである。即ち、現代社会において、工業社会と情報社会との関係は、階層制において捉えられるのであり、工業社会における機械原理の作用は厳然として存在しながらも、その影響が上位の情報社会の原理であるサイバネティクス原理には及ばないということである。又、機械原理によって情報社会を考察することは限界を伴うということである。

### (C) 情報化と経済活動の変容

情報概念の確立は、ニュートン力学に依拠する機械論的世界観から情報と制御を基軸とするサイバネティクス原理に基づく世界観への転換を意味しているのである。そのような世界観、従って経済学におけるパラダイムの転換は、従来の資本制経済とは大きく相違する新たな特徴を生起させているのである。その点について見ておこう。第一は、社会システムの構成要素が「情報資源と実物資源」とに区別して把握され、社会が「情報空間と資源空間」（＝制御域と実物域）における構成として捉えられるということである。そこで特徴的なことは実物域から制御域が相対的に自立化してくるということである。それは実物に情報が内包されていたということでもある。

制御域は、情報の流れによって連結されているのであるが、その制御域の相対的独自性を認め、実物域と制御域との相互連関性において社会構成体を考察するという方法は、実物域の考察にのみ限定されてきた従来の社会構成体の構造と動態の考察方法における限界を乗り越える手掛かりを与えるものである。そこでは従来の「線形的思考」にかわって、「システム思考」をその基底におく考察方法の重要性が指摘されるのである。それが経済学における複雑性ということである。

第二は、システムの構成諸要素に対してフィードバック制御の作用が大きな役割を果し、社会システムにおいて原因と結果の「因果的関連」に替わって、「相互因果性の関係」が成立するということである。それは社会的意識の運動が社会的存在によって一面的に規定されるものとしてではなく、両者（意識と存在）が相対的独自性をもつものとして捉えられ、社会的物質代謝過程の自己組織性が検討の対象になるということである。

第三は、支配的労働の形態が大きく変容しているということである。単純労働の割合が低下し、管理的性格をもつ情報処理労働の占める割合が上昇しているのである。この管理的能力をもつ労働者の増大は、社会システムにおける制御主体の新たな登場としての意味をもつものである。情報処理に関わる作業者が一定の集団を形成することによって、それは資本（機械体系）に対して

相対的自律性をもつものとして生成することが可能であるということである。情報社会においては、高い情報処理能力をもつ作業者の生産過程における「主体的制御」の可能性と、生活レベルでの高い見識に支えられた「生活者の集団」による市場システムへの参加の可能性が増大しているのであるが、それらの物質的基盤を創出しているのがME化である。

## (2) 近代化の二つの段階

### (A) 脱魔術化と再魔術化

15世紀頃までの西洋社会の人々は、いわば「魔法にかかった世界」に生きていた。それは生命力という理解の及ばない力をたたえた世界に対しての畏怖と共感に満ちた世界であったのである。しかし、それが16、7世紀の近代文明の登場と共に大きく変容するに至ったのである。マックス・ヴェーバーは、近代文明においては、「全ての事柄は原則上予測によって意のままになる」のであるが、そのことは「魔法からの世界解放」([2] 33頁)が可能になることを意味するものであるとしたのである。近代化の過程においては「それを欲しさえすれば、どんなことでも常に学び知ることができる」ということ、従って「そこには何か神秘的な、予測しえない力が働いている道理がない」([2] 33頁)ということ、それらが明らかになることであり、近代化とはそのような意味での魔法が解けることとしての脱魔術化の過程でもあるのである。

しかし、魔法からの解放、魔術が解けていく過程とは、呪術に訴えて自然との共生を計ることから、技術と予測によって自然を支配することへの転換でもあったのである。その転換過程を主導したもののこそ、近代科学であり、その生成と展開の過程は、現象界から「精神」を追放する過程でもあったのである。近代科学は、理論レベルでは全てを物体と運動に還元して説明するのであり、機械論哲学、還元的思考において特徴付けられるのである。科学的意識とは、自己を世界から疎外する意識であるが、人間を自然から分離する意識でもある。それは醒めた思考、参加しない思考、見るものと見られるものとを区別する思考をもたらしたのである。かくて、モリス・バーマンは、次のように近代文明を総括している。「全てが単なるもの—私と向かい合って存在する冷やかなもの—と化す。そして遂には私自身も他の何からも分離した一つの粒子のようになって、一様に無意味な世界の中に納まることになる。世界は私の行為とは無関係に成り立ち、私のことなど気にも懸けずにめぐり続ける。世界に帰属しているという感覚は消滅し、ストレスとフラストレーションの毎日が結果する」([5] 15頁)。いわゆる物象化世界の生成である。

ヴェーバーは、資本主義が経済生活の全面を支配するに至ることによって、強力な近代的経済秩序が形成されるが、その点に関連して、次のように指摘している。「今日の資本主義的経済組織は既成の巨大な秩序界であって、個々人は生まれながらにしてその中に入り込むのだし、個々人にとっては事実上、その中で生きねばならぬ変革しがたい鉄の檻として与えられているものなのだ」([3] 51頁)。強力な秩序界という「鋼鉄のように堅い檻」は、「圧倒的な力をもって、その機構の中に入り込んでくる一切の諸個人の生活のスタイルを決定しているし、恐らく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで決定し続けるだろう」([3] 365頁)とされるものである。ヴェーバーは、資本制経済の根本的特徴は、「厳密な計数的予測の基礎の上に全てを合理化し、経済的成果を目標として計画的且例言に実行にうつしていくこと」([3] 92頁)であるとしているが、そのような計算可能性という物象化の究極の結果が「鉄の檻」に他ならないとい

うことである。それこそがヴェーバーが、脱魔術化の結果、従って、資本主義発展の結果において見たものであったのである。

資本主義の発展とは官僚制の合理化の発展であり、その行き着く先が化石化した「鉄の檻」であるということである。バーマンは、それを科学的世界観という一つの論理体系の破綻の姿であるとする。「資本主義の破綻も、諸制度を等しく襲っている機能不全も、目を覆いたくなるような生態系の破壊も、本当に重要な問題を前にした時の科学的世界観の説明能力の低下も、仕事に対する興味の喪失も、統計に見る憂鬱・不安・精神病の増加も、全てはみな、一つの精神のあり方が確実に崩れ去りつつあることの現れなのだ」〔5〕22頁）。

この近代文明の破綻を救う道として、バーマンが提起するのは「再魔術化」である。「人類の歴史の99%以上に互って、世界は魔法にかかっていた。人間は自らをその世界の欠かせない一部として見ていたのだ。僅か400年余りで、こうした認識がすっかり覆され、その結果、人間の経験の連続性、人間精神の全体性が破壊されてしまったのである。そればかりか、地球そのものが今や破滅の一手手前まで来てしまった。再び魔法を蘇らせることにしか、世界の再生はない」〔5〕22頁）。現代の不安定状況を克服し、生の安定した足場を確保するためには、魔法に魅せられた世界を取り戻し、宇宙をもう一度我々自身のものにするこそが、現在、緊急に必要とされていることであるということである。ここで「魔法を蘇らせる」ということは、現象界において生を回復するということである。バーマンは、近代科学のパラダイムの本質的な問題点は、世界を生魔法から解き醒ましたことにあると捉えているのである。しかし、再魔術化は、錬金術の世界へ回帰することとは本質的に異なるのである。そのような回帰は現実的にも不可能である。

バーマンは、錬金術の世界観から学ぶことは「全体論的な世界観、参加する意識には生理学的な根拠がある」〔5〕172頁）ということであるとする。その「参加する意識」の生理学的根拠の故に、バーマンは、近代科学のモデルの転換を要請するのである。

バーマンは、デカルト的パラダイムにおいて追放されていた「精神」について、「〈精神〉とは身体全体によって、五感全てを通して得られた知の総体である」〔5〕200頁）とする。機械論的因果律と精神／身体二分法は欠陥を抱えた方法にほかならないとすれば、正しい知覚を得るためには「生物学的エネルギーの核の繋がり」〔5〕197頁）を取り戻さなければならないということである。

M. ポランニーは、知の存在形態を暗黙知と顕在知において区別して捉えることを提起した。暗黙知とは、「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」という事実に依拠して成立するものである。これに対して、バーマンは、ポランニーは未だデカルト主義の枠の中に囚われており、「身体的なものと頭脳的なものとははっきりと結びつけることが出来ずにいる」〔5〕170頁）としているのである。バーマンは、理知は根底において情動に根ざすものであるとすれば、人がものを理解する際において「身体的な知こそが根本にある」〔5〕171頁）とするのである。即ち、本来、「身体的なもの」と「頭脳的なもの」との統一において存在していた知が、近代科学によって「身体的なもの」は対象外に追いやられ、「頭脳的なもの」のみが存在するものとされるに至ったということ、そしてそれこそが脱魔術化であるとされたのである。その過程が行き着いた先にあるのは、追放された「身体的なもの」を取り戻すことであり、その意味における再魔術化であるということである。<sup>2)</sup>

かくて、近代化の過程は、魔術が解け、身体的なものが現象界から捨象されていく脱魔術化の過程と、捨象された身体を取り戻し、再び精神と身体の一統を図る再魔術化の過程との二つの過程において捉えられる必要があるといえよう。工業社会が脱魔術化の過程であったのであり、それ故に、工業社会の終焉とともに近代化が終了したのではないのである。情報社会はポストモダンではないということである。工業社会から情報社会への転換とは、脱魔術化の過程から再魔術化の過程への転換でもあったのである。脱魔術化の過程の結果が、「鉄の檻」であることから、近代化をいわば否定的に捉えることは適切ではないといえよう。<sup>3)</sup>

#### (B) 事実と価値の統合と全体論的思考

近代科学のモデルの特徴の一つは、「事実」と「価値」を分離し、「精神」を現象界から追放してしまっただけにある。それ故、近代科学至上主義を止揚するのに対して、「精神」を取り戻し、事実と価値との再統合が不可欠なのである。パーマンは、そのような試みをグレゴリー・ベイトソンの思想体系に求めているのである。ベイトソンの思想体系は、いわば全体論を展開したものであるが、そこではプロセスを重視した探究方法が採用されているのである。それは「例えば色なら色という現象を、サイバネティック的、システム的に見て、それをより大きく精神の一部として捉える」（[5] 319頁）ということである。ここで指摘されている〈精神〉の中には、観察者自身も取り込まれている。その分析は、必然的に量的な関係だけではなく、質的な関係も研究対象とされることになる。即ち、そこに存在する基本的な配列関係、様々なレベルの〈精神〉、そしてそれらのレベル同士の相互反応の本質などを、その考察の対象とするということである。ベイトソンの思考方法においては、「〈精神〉は物体と全く同じに現実である」とされるのである。「〈精神〉は、宗教的原理でもなければ生氣論的な生命力でもない」ということである。ベイトソンにおいて、「精神」は「物体の中に『潜む』ものとしてではなく、諸現象の結びつき方と行動の在り方そのものが『帯びる』ものとして捉え」（[5] 274頁）られているということである。

又、ベイトソン思考の中心的概念であるサイバネティック的とは、「関係こそ現実の本質である」という考え方である。「関係の網」に集中することによって、「原初的な知、特に〈精神〉を巡る知が美的認識という形でよみがえり、技巧的な（芸術的な）科学（世界についての知）を我々は手にすることができる」のであり、一体化と分析の両方を手に入れ、それらが「二つの文化」の分裂を生むのではなく、「互いに補強し合うようになる」（[5] 320頁）ということである。「人間は環境と一体化的な関係を持って初めて、現実に対する真の洞察が得られる」のであり、そのような洞察が分析的理解の中心となるのである。かくて、パーマンは、「こうして事実と価値が合体する。〈精神〉とは価値であると同時に分析の一つの方法であることが明らかになる」（[5] 320頁）とするのである。<sup>4)</sup>

パーマンは、ベイトソンのサイバネティック理論を、斧を持ち木を切る男の行動を例にして、次のように説明している。

「斧の一打ち一打ちは、その前の一打ちが、木にどのような切り口を刻んだかということに合わせて調整される。ここにあるのは〈内〉なる「自己」が〈外〉なる木を切倒すというのではなく、一つの関係が一システムとしての回路、即ち〈精神〉が一生成するという出来事である。生を帯

びるのは状況全体であって、人間として切出されたものではない。生は回路の中に内在するのであり、その外に超越的に存在するのではない。この場合〈精神〉は、〈木―目―脳―筋肉―斧―斧の打ち下ろし―木〉という回路である。正確には〈木における違い／網膜における違い／斧の動きにおける違い／木における違い〉というふうに形を変えながら循環する差異の一つまり情報の一回路である。この情報の回路こそが〈精神〉即ち自己修復ユニットなのである。それは様々な経路からなる網状組織として捉えることができる。目的を持った意識のところでは切れるのでもなければ、皮膚のところでは切れるのでもない。全ての無意識の思考の経路と、情報が循環するための全ての外的経路をも含めた、一大ネットワークなのだ」（〔5〕284～5頁）。

ここで、サイバネティクス理論においては、考察の単位は一つのシステム全体であり、一つ一つの構成要素ではないということ、「一個」の情報とは、「違いを生む違い」であるということ、それ故、構成要素が、複雑な連鎖の回路を構成していて、ある一つの要素の働きに生じた変化―「違い」―が、システム全体に伝えられ、それによってシステムは、「感知」とも言うべき反応を示すということ、これらの点が明らかになるとされているのである。そこには一種の心的特徴が存在しているのである。その意味で、システムは生きているものと見なされ、そのような心的特徴をもって、一種の「精神」とみなされるということである。心的特徴は、諸要素の組み合わせ全体の中に備わっているものであり、出来事や事物の如何なる組み合わせも、それが連鎖の回路に相応しい複雑さと、それに見合ったエネルギーの関係を有している限り、それは全て心的特徴を示す、ということである。又、ここでの回路とは、一人の個人ではなく、その個人が埋め込まれた関係のネットワークのことである。「一人の人間はそれ自体一つの〈精神〉だが、一旦斧を手に取り木を切り始めれば、彼はより大きな〈精神〉の一部になるし、彼の周りの森はそれよりも更に大きな〈精神〉である」（〔5〕302頁）ということである。そこでは〈精神〉の階層制が強調されているのである。

### （3）情報社会と経済学のパラダイム転換

パラダイムとは、一連の前提、見方、法則、慣習及び信念の集合であり、それによって、科学が追求している様々な問題が証明されるというものである。パラダイムの転換は、科学者が直面する難問が、既存の一連の大法則の中では益々答えにくくなった時におこるのである。現在の特徴は、経済学を成立せしめているパラダイムそのものが大きく転換しつつあるということである。社会・経済システムの根源的なレベルにおいて機械論的世界観がその限界を露呈し、新たな世界観の模索が始まっているのである。新たな世界観の原理とは何か、新しいパラダイムとはどのようなものかは、未だ明確になっていない。それ故、仮説の域をでるものではないが、ここでは、それを「サイバネティクス原理」としたのである。それは現代の資本制経済を情報段階として規定し、地球環境問題に対して、経済学的解明の理論的手掛かりを与えるものである。

経済学は、その生成の時から、近代科学のパラダイムと密接に結び付いていたのであり、その理論的根拠を自然科学の方法論に依拠してきたのである。経済学の世界に対して決定的な影響力をもったのは、ガリレオに始まり、ニュートンにおいて完成する古典力学である。そこでは個々の物体の運動の研究から、一般的な「運動の法則」が定式化され、自然を一般的な数本の記号方程式によって記述することが可能であり、その方程式によって自然のコントロールが可能になる

とされたのである。ニュートン力学においては、全宇宙は「重力の法則」という単一の法則が支配する力学的体系として捉えられたのであり、その「重力の法則」によって、宇宙には秩序と調和が実現するとされたのである。それは「美と調和と論理的整合性」が重視される世界である。そこでは無機的な「力」、物質の「量」と距離だけに依存して、全ての方向に一様に作用する「引力」だけが問題であるとされたのである。そこでの大きな特徴は、計量化思考の重視により、部分の合計によって全体が構成されるものとされることである。それは機械におけるように、たとえ部品に故障が生じたとしても、その部品を取り替えることで元の機能を回復させることが可能であるということである。この部品の「取り替え可能性」こそは、機械論の原点でもあったのである。その思想が「経済システム」に適用されることによって、人間は、一人一人掛け替えの無い存在としてではなく、機械の部品と同じ様に他との取り替えが可能であるとみなされたのである。夫々の人間の個性が重要なのではなく、他と同質的であることこそが重要であるということである。それは人間の浪費化の始まりでもあったのである。そのような機械論的世界観において資本制的市場経済システムを考察すれば、それは「歴史という軌道の上を進行する一個の自動機械」として見なされたのである。

経済学におけるパラダイムの転換とは、経済活動を基底において規定している原理の転換を意味するものである。現代においては、それは「機械原理」から「サイバネティックス原理」への転換として捉えられるのである。そのような転換を生産過程における問題として見れば、トランスファーマシンに代表される機械体系から、フィードバック制御によって特徴付けられる自動制御機構を独立化させたFMSへの展開として捉えることができるのである。又、流通過程においてはPOSシステムとCIMとの結合による生産と流通の一体化の傾向を基盤として、消費と生活が全経済社会の動向を規定するものとして立ち現れつつあることとして捉えることができるのである。それは現実的には、「生活の欲求」や個人的消費を狭い意味での経済に従属するものとしてではなく、「人間の個性的生活過程」として規定し、経済学体系の中軸の一つに据えるということである。生活や消費に関わる問題が、単に経済学の各論の一つとしてではなく、体系構成の一環として位置付けられねばならないのである。その点からすれば、情報化とは、現在が経済社会における転換期であることを指示するキーワードであり、物の見方、考え方の転換を意味しているものとして捉えられるのである。情報化は、人間の機械の論理への従属としてではなく、人間の主体的な選択範囲の拡大を可能にする物質的基盤の生成として捉えられねばならないのである。<sup>5)</sup>

19世紀において、機械は、人類に豊かな社会を約束するものとして登場したのであり、「機械原理」は、「西欧中心主義、理性中心主義」の下において、地球全体が文化的に均質化されるといふ「進歩的幻想」を産みだしたのである。しかし、今や、そのような人間中心主義に終止符が打たれるべきであり、「共生の思想」こそが重要視されねばならないのである。生命は、柔軟に成長し、豊かな多様性を生み出すのであるが、そのような生命の原理こそが、今、求められているのであり、人間にとって真の豊かさとは、多様性を反映した「異質文化の共生」を可能にする世界のことである。そのような世界を展望しうるものとして経済学のあり方を考えることがパラダイムの転換なのである。

J. ガルブレイスは、かつて「経済学の欠陥は、最初に誤りがあったからではなく、陳腐な理論

を改めないことにある。陳腐化の原因は、便利なものが神聖不可侵のものとなったことにある」（『ゆたかな社会』）とした。既に「陳腐」になった理論が改められねばならないのは、具体的に言えば、機械原理によって、工業社会を超えるものとして出現している情報社会を考察することの誤りである。情報社会の分析は、それに相応しい原理、サイバネティックス原理に基づいてなされる<sup>6)</sup>ことが必要なのである。

## （Ⅱ）経済の人間化と持続可能な社会

生産と消費について、人間化が問題であるということは、その媒介的契機に持続可能な社会が想定されていることによるものである。即ち、社会が持続可能であるためには、現在とそして将来にわたっての経済活動は如何なるものでなければならないのかということ、そこでは如何なる変容が不可避なのかということである。それを換言すれば、生産や消費を「人間の身の丈」に合ったものに転換するということである。この「人間の身の丈」に合ったということは、シューマッハが技術の発展方向について指摘したことである。シューマッハは、技術の発展方向について巨大化ではなく、「人間の背丈に合わせる方向」（[11] 211頁）に転換する必要があるとしたのである。それは単に技術にのみ関わる問題ではなく、消費についても指摘できることである。然るに、この「人間の身の丈」に合った消費を主張するためには、消費者は、消費の決定に対して、意識的、主体的、意志的に判断していくことが想定されねばならないのである。かつて K. ボランニーが社会から突出してしまった経済を再び社会の中に取り戻す必要があるとしたが、その経済を社会の中に位置づけるということを具体的に問題にした場合、ここでのように消費の人間化ということになるのではないだろうか。

J. スペスは、「地球環境危機を前に市民は何をなすべきか」を論じている。そこでは、先ず、現代世界における経済拡大の結果として生じた特徴を四点について指摘している。第一に、20世紀の成長によって、健康、教育、生活水準は著しく向上したが、その代償として莫大な環境コストが支払われてきたことである。第二は、20世紀の発展は、人間活動及びその影響を地球規模にまで拡大したということである。第三の特徴は、世界経済の前進に大きな弾みがついていることである。その際、スペスは、増え続ける人口と増大し続ける需要が私たちに突きつける大きな問題は、水、即ち清浄な淡水の供給の問題であるとしている。20世紀の石油から21世紀においては水が紛争の種になるということである。第四番目の特徴は、人間社会は、地球を管理する立場に立たされるに至っているのであり、そこでは根本的に全く新しい倫理的立場が要請されているということである。かくて、スペスは、「この新たな巨大な重責は、私達の経済的成功の代価である。これを招いたのは私達自身である」（[7] 16~25頁）とするのである。

ここで、地球管理の要請から「新しい倫理的立場」が確立されねばならないとされているのである。それは単に現代の科学・技術の利用に必要とされる倫理・モラル以上のものが必要であるとされているものといえよう。スペスは、それを「私達が住むこの地球との関わりの中で自分達を見つめるような、これまでとは違う捉え方である」（[7] 172頁）としている。それがパラダイムの転換であるということは明らかであろう。

次いで、スペースは、「持続可能な社会」へ移行するためには、八つの目標を達成することが必要であるとする。それは「成長の再定義とその方向転換を目指すもの」（〔7〕174頁）であるとされる。①世界人口の安定化又は縮小。②大規模な貧困の克服。③環境に優しい技術。④環境適正価格（市場問題）。⑤持続可能な消費。⑥知識と学習の分野での移行。⑦制度とガバナンスの移行。⑧最も根本的な目標は、文化と意識における移行である。（〔7〕173～233頁）

この中でスペースが強調するのは、最後の新たな文化と意識の生成についてである。スペースは環境倫理には、二つの中心的概念があるとする。第一は、「生物を生物自身のために保護すること」であり、第二は、「我々にとって必要なことは、将来の世代のために地球の美しく豊かな自然の管理人としての任務を果たすこと」（〔7〕222～3頁）である。この二つを内包する新たな人生観や世界観が求められているということである。

我々がスペースの提案の中で重要性を感じるのは、第五の「持続可能な消費」について取り上げられていることである。それは経済の在り方が「消費」の在り方に還元されるものとされていることにおいて重要であり、消費を独立変数として捉えていることにおいて従来の経済学的手法とは相違するものが理論的には前提されているといえよう。

持続可能な消費について、スペースは、次のように指摘している。「個人消費者と家庭は、市場で絶大な力を発揮することができる。消費者はその好みを驚くべき速度で変えることができる。私達は新しい『持続可能な生活運動』を起こし、環境のために賢い選択をし、社会について高い意識を持つ消費者と家庭を急速に拡大していかなければならない。持続可能な生活運動は、それが必要な様々な分野で、急速な変化を最大限に進めることができる。持続可能な食生活運動をすれば、アグリビジネスと漁業の転換を促すことになろう。持続可能なエネルギーシステムへの消費者の積極的な関与は、気候の保護を図りつつエネルギー生産方法を変化させ、有害物質のない家庭と職場の環境への取り組みは、化学工業に安全な新製品の開発を迫るものとなる」（〔7〕191頁）。

スペースは、持続可能な生活運動を通して、経済の在り方、産業構造の在り方、生産の在り方等に大きな変容をもたらされるとするのである。そこでは、現代経済において、消費の在り方が決定的な重要性を持つに至っていることを前提としているのである。又、持続可能な生活運動において決定的に重要なことは消費者が、賢い選択をし、社会について高い意識を持つことが要請されるということである。何れにしても、スペースが強調するのは「意識の変化」（〔7〕225頁）、意識の改革こそが現実問題として必要とされているということである。

次いで、スペースは、消費者の現実的在り方として、三つのことを指摘している。第一は、「環境に優しい方法で生産され使用される製品やサービスへと、私達の買い物を切り替えることができる」ということである。第二は、「生活製品のリサイクルとリユースの仕組みを整備するよう主張できる」ということである。第三は、「基本的考え方のレベルで、私達は過剰消費と浪費をモラルに反すると認める価値観へと切り替えていかなければならない」（〔7〕191～2頁）ということである。

ここで問題なのは、「過剰消費と浪費」についてである。過剰消費とは、環境条件との関係において「人間活動の規模」（〔7〕188頁）に適正な水準が存在するのであり、それを超える消費が何れも過剰とされるということである。スペースは、人間活動のあるべき規模を環境条件との関係

において捉えているのであるが、我々は、それをより主体的に「身の丈に合った」消費として規定するのである。

又、浪費とは、生産の局面において見れば「製品をつくるために投入されたもののうち、顧客にとって何も価値を生み出さないすべてのコスト」（[12] 219頁）と規定される。唯、何が本来の浪費かは、「動く標的」のようなものであるから一概には定められないが、「投入物をできるだけ少なくしようと試行錯誤することが資源生産性への強烈的な刺激となり、それが又絶え間ない挑戦と達成感の源となる」（[12] 219頁）という関係が存在することは確かである。

スペースは、結論として、「必要な変化は、放っておいては起こらない。見えざる手が技術や経済を持続可能な発展に向かって導いているわけではない」として、「今や本物の環境運動をしなければならぬ。市民であり消費者でもある私たち一般国民が、主導権を取って動くときが来たのである」（[7] 228頁）としている。

ここで、経済活動において一般国民が主導権を取るのには、問題が環境問題だからではない。情報社会においては、消費が経済活動において主導性を持つことによるのである。然るに、消費の主導性とは販売の決定性のしからしむるものである。

スペースは、地球管理人として「文化と意識における移行」の観点から消費を問題にし、消費の在り方を理念化したのであるが、消費の在り方について、より現実的な提起を行うのが A. ダーニングである。次のように指摘している。

「つまるところ、相互に結ばれた人類と自然界の運命は、私達消費者にかかっている。化石燃料や鉱物、紙といった生態系に有害なものの使用は削減できる。又、幸福の主要な心理的決定要因である充足感の非物質的な源泉、即ち家族や友人達との人間関係、有意義な仕事、自由時間を、より深いものに育むことはできる。もしそうでなければ、私達は責任を放棄し、自分達のライフスタイルが地球を衰弱させるのを放置することになる。消費水準を下げることは、真に重要な財やサービスを失ってしまうことではない。それどころか、人生で最も意味があり楽しい活動は、環境的にみても美德であることが多い。多くの人が有意義な時間の過ごし方だと感じることの大半は、環境の持続性を全く損なわないものだ。宗教的修養、会話、家族や隣人との団欒、観劇、音楽、踊り、文学、スポーツ、詩、芸術性や創造性の追求、教育、そして自然の鑑賞。これらは全て、そのまま永続の文化—末代にわたるまで時の試練に耐え得る生活様式—にすんなり適合するものなのだ」（[8] 150～1頁）。

ここでダーニングは、非物質的消費こそが重要であり、それ故に、消費者一人一人の消費行動の在り方が人類と自然界の運命を握るものであるとするのである。その際、ダーニングは、「消費者には消費を抑制する倫理的義務がある」（[8] 150頁）とする。消費者一人一人は「生活全般の簡素化」（[8] 153頁）を追求することが不可避であるということである。換言すれば、現代社会に生きる消費者は、過剰消費から「足るを知る哲学」（[8] 158頁）へと生活態度を根本的に変換することが求められているということである。そのような日常生活におけるパラダイムの転換を通して、消費水準を下げ、ライフスタイルを物質的なものから非物質的なものへと転換することが可能になるのであり、そのこと自体は、地上の生命の未来にとって決定的な意味をもつことに他ならないのである。経済学のパラダイム転換ということも詮じつめれば、我々一人一人の消費生活の在り方の転換であり、人間の倫理・モラルの転換に他ならないということである。

しかし、「足るを知る哲学」によって生きようとする人々が多数輩出してもそれには限界がある。環境倫理が社会的にフォローされねばならないのである。そこでダーニングは、個人と社会の関係について、次のように指摘している。

「新しい価値観というものは、観念論として現れることはない。具体的な状況、新しい現実、新しい世界認識の中に出現する。倫理は実践の中に、毎日の小さな意志決定の積み重ねの中にしかな存在しないのだ」（〔8〕151頁）。「つまるところ価値観とは、個人が作り出すものであると同時に、社会が作り出すものである。それが私達の行動を効果的に制限したり方向づけたりできるのは、社会機構の後押しがあるときだけである。少なくとも消費する生き方を倫理的な規準として力あるものにするには、究極的には、文化—集団として共有する記憶、英知、しきたり—の中に眠っている非消費の哲学を蘇らせ、新しい永続の文化を形作るために活用する必要がある」（〔8〕161頁）。

ここで個々人の間に生成する環境倫理をミクロとし、文化としての「非消費の哲学」をマクロとすれば、そこには当然ミクロ・マクロ・ループの生成を想定することができるのである。そのミクロ・マクロ・ループの生成に際して「社会機構の後押し」が極めて重要な意味を有するということである。ダーニングは、そのような作用を、「変化は何年もの間殆ど気づかないほどゆっくり進行し、ある時点で急に加速して状況が打開される」（〔8〕162頁）としたのである。何れにしろ、消費を簡素にし、「脱消費」（〔8〕165頁）に至ること、それが社会を持続可能にする決定的な契機であるといえよう。それはヴェーバー的に言えば、意図せざる結果としての「禁欲の回帰」現象なのであろうか。<sup>7)</sup>

（本稿は、2005年1月14日、立命館大学経済学会の主催の下で行われた筆者の退職記念講義「情報社会と経済の人間化」の報告を加筆、訂正したものである。）

#### 注

- 1) 1930年代、E. フッサールは、学問が生に対する意義を喪失したとして、その淵源は、ガリレオによる「自然の数学化」=「自然の量化」にあるとした。この点については、文献〔17〕において論じたことがある。
- 2) 山之内靖は、「総力戦時代の軍事技術が美的創造を刺激する魔術として作用していた」として、「総力戦体制下の社会科学は、ニュートン力学的な厳密科学乃至法則科学としての性格を抜け出したのであり、その構成の只中に、文化的価値要因乃至心理学的操作・誘導要因を内在化していった。科学は客観性の建前を放棄して心理操作の学へと変容した」（〔15〕13頁）としている。それが再魔術化への転換であるということである。

更にケン・ウィルバーは、近代を「道徳・科学・芸術（善・真・美）という価値領域の差異化」（〔4〕16頁）として定義し、その差異化された諸契機の再統一において近代化の発展過程を論じている。ウィルバーは、前者において脱魔術化の過程の展開であり、後者において再魔術化の過程の展開であるとするのである。即ち、差異化によって、「今や夫々の領域が、他の領域から暴力や支配を受けずに、自らの真理を追求できるようになった」（〔4〕64頁）ということである。これに対して、ウィルバーは、スピリチュアルな次元を再導入することによって、宗教と科学を統合しようとするのである。そのような統合は、「前近代の叡智の最良のものと近代の知識の最も輝かしい部分を結びつけ、近代知性を遙かに凌駕する方向で真理と意味を一体化することだろう」（〔4〕19頁）ということである。それが再魔術化ということである。

- 3) 情報社会を近代化の第二段階として捉える場合、従来の物象化論、疎外論の意義が問題になる。例えば、マルクスは、『共産党宣言』において、次のように指摘しているのである。「ブルジョアジーは、彼らが支配権を握った所では、封建的な、家父長制的な、牧歌的な関係を、残らず破壊した。人間をその生まれながらの目上と結びつけていた色とりどりの封建的な絆を無慈悲に引きちぎり、人と人との間に、露骨な利害、無情な『金勘定』の他には、何の絆をも残さなかった。ブルジョアジーは敬虔な法悦、騎士の感激、町人の感傷といった神聖な情熱を、利己的な打算の冷水におぼらせた。彼らは、個人の品位を交換価値に解消し、特許状で許され、立派に勝ち得られた数々の特権を、唯一つの非情な商業の自由と取り替えてしまった」(岩波文庫, 30頁)。しかしここでの物象化は、次の新たな段階へ移行するいわば前提条件のようなものである。交換関係が一旦は貨幣関係に還元されることによって一般化されるのである。問題は、そこで留まるのか、先に進むのかである。貨幣関係に還元された人間関係に如何なる意味を付与するのか、それが次に問われるのである。
- 4) ベイトソンは、サイバネティックスの意義について、次のように指摘している。「サイバネティックスは過去二千年の間に、人類がかじった知恵の実の中で、最も強力なものだと私は思っています。これほど大胆にガブリとやったことはなかったでしょう。これまでも、りんごの実は、嚙っても中々消化できないのが常でした。その理由も、サイバネティックスによって与えることのできるものです。サイバネティックスの知は、内的なバランスともいべきものを秘めていて、その知にのめり込んだ人間が狂気へ誘い込まれそうになると、それに気付かせてくれるというところを持っています。しかし、気付くのはあくまでも我々で、サイバネティックス自体に、我々を罪から守る力があるわけではありません」([13] 631頁)。「サイバネティックスは新しい、そして恐らくよりヒューマンな、世界への対し方を内に秘めている。現在支配的な制御の哲学に変更を加え、我々の愚行をより大きなパースペクティブの中に映し出す—そのための手段にサイバネティックスがなれるということは、間違いないところです」([13] 632頁)。
- 5) マルクスは、『経済学批判』において商品の販売過程は、「商品の命懸けの飛躍」であるとしている。それは購買された生産諸要素を生産過程において生産物に転換したとしても、それだけでは利潤が実現されたことにはならないのであり、生産物が商品として販売されることが資本にとって利潤実現の決定的契機であるということである。然るに、そのことは資本の運動において貨幣所有者は決定的な位置に立つということでもある。換言すれば、消費者という貨幣所有者は、利潤の実現の成否を握るということでもある。工業社会においては、生産物の生産が重視され、如何に生産するかが問題にされてきた。販売過程は、とにかくクリアーされるものとして議論されたのであり、現実の生産においてそのような想定のもとで生産が行われたのである。しかし、それは現実のクリアーではなかったので、結果的には、過剰生産恐慌を惹起したのである。そこには環境に対する配慮はありえても付随的ではなかった。生産性を如何に高め、生産をどのように拡大するかの論理しか存在しなかったということである。しかし、情報社会においては、如何に消費するかが決定的になってきているのである。それは、論理的にも、事実的にもそうであるということである。情報社会においては、生産は販売の困難性を如何に回避するかを巡って展開されているのである。そこでは過剰生産の可能性は決定的意味を持ち得なくなっている。生産は需要情報(それは結果情報にすぎないが)をリアルタイムで入手することが可能になっているからである。「商品の命懸けの飛躍」については、柄谷行人 [14] 第二部第1章において問題にされている。
- 6) 本節の一部は、拙著 [19] からのものである。
- 7) 土井乙平は、消費についての新しい発想に関して、次のように指摘している。「商品生産社会において生活の質を意識して充実した経済生活を送るためには、生産者及び消費者が、夫々の場で個別に考える断片的経済生活を自戒して、生産者も消費者も日常生活文化を現実的基盤にしながら、商品企画段階をも含む生産領域、及び流通段階・消費過程を含む消費領域の全領域を総体的に把握する視点が重要となります。生産者は消費者の要望・考え・立場を十分に考慮して商品の企画・生産・販売をし、消費者は目の前にある商品を見て買うのではなく、その企画・生産・流通・販売・アフタケア—

の全ての領域にわたって理解し納得して商品購入をする必要があります。消費を無視した生産は早晩衰退し、生産・流通を考えない消費は生産論理に操られて実質的に貧弱な消費生活を余儀なくされます。そこで、まずは消費者が日常生活文化を基盤にして伝統を理解し、教養と知性と感性を磨くのです。消費者の質が向上すれば、生産者は生き残りをかけて、消費者の立場を考慮した商品生産をしましょう」（[10] 17～8頁）。土井は、消費者が「日常生活文化を基盤にして伝統を理解し、教養と知性と感性を磨く」ことによって、充実した経済生活を送ることが可能になるとしているのである。そのような人々、即ち、いわゆる教養人といわれる人々は、わが国においても多数存在していた。それらの人々の生き方が環境倫理に適応的なものであったとしても、それが社会的なものに転換していかなかったことが問題なのである。又、そこでは消費者の成長と消費の在り方の問題が区別されていないといえよう。消費の在り方の議論において「過剰消費と浪費」に対する批判の論拠をどこに見出すのかということが何ら示されていないのである。

#### 参考文献

- [1] 藤沢令夫『ギリシア哲学と現代—世界観のありかた—』岩波新書, 1980年。
- [2] マックス・ヴェーバー, 尾高訳『職業としての学問』岩波文庫, 1980年。
- [3] マックス・ヴェーバー, 大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫, 1989年。
- [4] ケン・ウィルバー, 吉田訳『科学と宗教の統合』春秋社, 2000年。
- [5] モリス・バーマン, 柴田訳『デカルトからバイトソンへ—世界の魔術化—』国文社, 1989年。
- [6] 伊予谷登士翁・成田龍一編『再魔術化する世界—総力線・〈帝国〉・グローバリゼーション—』御茶ノ水書房, 2004年。
- [7] J.G. スペス, 浜中監訳『地球環境危機を前に市民は何をすべきか』中央法規, 2004年。
- [8] A. ダーニング, 山藤訳『どれだけ消費すれば満足なのか—消費社会と地球の未来—』ダイヤモンド社, 1996年。
- [9] 山崎正和『社交する人間—ホモ・ソシアビリス—』中央公論新社, 2003年。
- [10] 土井乙平編著『消費社会はいま—新しい発想で消費を考える—』法律文化社, 2004年。
- [11] E.F. シューマッハ, 小島・酒井訳『スモール イズ ビューティフル—人間中心の経済学—』講談社学術文庫, 1986年。
- [12] P. ホーケン, E. ロビンス, L. ロビンス, 佐和監訳『自然資本の経済—「成長の限界」を突破する新産業革命—』日本経済新聞社, 2001年。
- [13] G. ベイトソン, 佐藤訳『精神の生態学』（改定第二版）新思索社, 2000年。
- [14] 柄谷行人『トランスクリティーク—カントとマルクス—』批評空間, 2001年。
- [15] 山之内靖『「再魔術化」する世界をめぐる—ヴェーバーからパーソンズへ, そして再びヴェーバーへ—』富永・徳安編『パーソンズ・ルネッサスへの招待』勁草書房, 2004年。
- [16] 高木彰『再生産表式論の研究』ミネルヴァ書房, 1973年。
- [17] 高木彰『「自然の数学化」と学問の『危機』—E・フッサールの後期の所説に関連して—』『立命館経済学』49—4, 2000年。
- [18] 高木彰『現代オートメーションと経済学—現代資本主義論研究序説—』青木書店, 1995年。
- [19] 高木彰『現代経済学の基礎理論』創風社, 1996年。